

## 発表題目: ダントーの物語り文の形式化の試み

氏名: 野村尚新 (Shoshin NOMURA)

所属: 国立情報学研究所

### 本文

ダントーの『物語としての歴史』 [2] は分析哲学における歴史研究で重要な位置を占めている。ここにおいて主張されているのは歴史の客観的実在性の否定であり、それは文学的な構造を持ったある種の「物語り」 (narrative) であるということ、である。ダントーは歴史を時系列順に並べられた単なる過去の出来事の列とは考えなかった (この列は年代記と呼ばれる)。仮に超人的な存在がすべての出来事を時系列順にリアルタイムで書き記していったとする。この理想的な年代記を持ってしても、そこには歴史叙述は含まれていない。なぜなら、ダントーによると歴史叙述は、過去の出来事を“後から” 振り返り特定の文脈において関連付ける「物語り」という言語行為によって生成される「物語り文」だからである。このようなダントーの非実在的歴史観は図 1 のように表すことができよう。ここにおいて、列  $(e_1, e_2, e_3, \dots)$  は時系列で並べられた過去の出来事の列であり、それらの内二点を結ぶ弓状の矢は物語りによる出来事の関連付けを表現している。その矢は例えば、‘cause’ などの関係が考えられる。

例えば、 $e_4$  という出来事において、「ハンニバル軍はアルプス山脈を超えた」が成り立ち、出来事  $e_2$  において「ハンニバル軍がローマ軍に勝利した」が成り立つと考える。これらの出来事を原因と結果という関係で関連付けることで、「ハンニバル軍はアルプス山脈を超えて、その結果、彼の軍はローマ軍に勝利をもたらした。」 (これを文 H とする) という物語り文、もしくは、歴史叙述が形成される。つまり、彼によると歴史は過去の出来事や史料の集まりだけでなく、それらを関連付ける物語りの集まりも含んでいるのである。

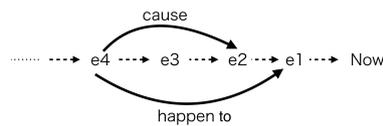


図 1.

このようにダントーの歴史観はある種のグラフ構造で捉えることができる。そして、このようなグラフ構造は様相論理のクリプキ意味論で表現することができる。さらに様相論理に演算子  $@_a$  を加えたハイブリッド論理 [1] の形式言語で表現してみよう (ここにおける、 $@_a\varphi$  は ‘at  $a$ ,  $\varphi$ ’ と読まれる)。原子論理式  $p$  を「ハンニバル軍はアルプス山脈を超えた」、 $q$  を「ハンニバル軍がローマ軍に勝利した」とする。これにより、文 H は  $@_{e_4}p \wedge @_{e_2}q \wedge @_{e_4}\langle \text{cause} \rangle e_2$  と表現できよう。

他方、歴史を歴史叙述、つまり、物語り文の束であると考えれば、歴史は常に流動的であると言わねばならない。なぜなら、新たな史料が発見されたならば、われわれはそれを既知の史実と関連付けて物語るからである。物語り文を先のようにクリプキモデルで表現するならば、この意味論では歴史の可変性を表現できない。このモデルは通常一度与えられたら変化しない静的なモデルだからである。これに対し、近年、認識論理の分野において、動的認識論理と呼ばれる外的な要因による

クリプキモデルの動的な変更が可能な論理が研究されている。なぜなら、人間の認識状態は外からの情報で変化するのは自然なことだからである。そして、ハイブリッド論理にこの動的な特徴を加えた論理体系、ハイブリッド公開告知論理 [3]、もすでに研究されている。本発表の企図は、このハイブリッド公開告知論理に基づいて流動する歴史、物語り文の集まり、を形式的に表現することである。

## References

1. Blackburn, P., Seligman, J. Hybrid languages *Journal of Logic, Language and Information* 4(3), 251-272, 1995.
2. Danto, Arthur C. *Analytical Philosophy of History*. Cambridge, Cambridge University Press, 1965. [邦訳 アーサー C. ダント、『物語としての歴史』、河本英夫訳、国文社、1989].
3. Hansen, J.U. A hybrid public announcement logic with distributed knowledge *Electronic Notes in Theoretical Computer Science* 273, 3350, 2011